

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 419 回 「フランダースの犬」と日本人の美学

2011.5.15

『フランダースの犬』、原作は英国人作家ウィーダが 1870 年代に書いた小説。日本では 1975 年 1 月 5 日から同年 12 月 28 日までにフジテレビ系列の「世界名作劇場」枠で放映されたテレビアニメシリーズで有名だ。その救われない物語から、本放送から 30 年以上を経た現在でも広く知られている。

特にその最終回「第 52 話 天使たちの絵」の悲劇的なシーンが忘れられない。

「パトラッシュ... 疲れたら...、僕も疲れたんだ...、何だかとても眠いんだ...」のセリフとともに、大聖堂のなかで忠犬パトラッシュと共にネロが、賛美歌『主よ御許に近づかん(しゅよみもとにちかづかん)』(Nearer My God To Thee) に導かれ天国へと昇っていくシーン。今思い浮かべても涙が出てくる。最終回の視聴率はビデオリサーチ・関東地区調べで 30.1% を記録。これは「世界名作劇場」枠内アニメの視聴率の最高記録である。

これほどまでの感動ドラマ「フランダースの犬」。少し古い話題だが、実は日本人だけが共感し、欧米では全く評価を受けていないことがベルギーで検証された(2007 年 12 月 25 日読売新聞)。原作も欧州では、「負け犬の死」としか映らず、評価されることはなかった。米国では過去に 5 回映画化されているが、いずれもハッピーエンドに書き換えられた。悲しい結末の原作が、なぜ日本でのみ共感を集めたのかは、長く謎とされてきた。

ベルギーの調査では、3 年をかけて謎の解明を試みた。資料発掘や、世界 6 か国での計 100 人を超えるインタビューで、浮かび上がったのは、日本人の心に潜む「滅びの美学」だった。「日本人は、信義や友情のために敗北や挫折を受け入れることに、ある種の崇高さを見いだす。ネロの死に方は、まさに日本人の価値観を体現するもの」と結論づけた。桜の花をこよなく愛す日本人は、満開を誇る桜堤から、どこ先となく急ぎ散ってゆく桜吹雪を見、風に舞う花びらに儂さを感じる日本人、その「滅びの美学」の価値観であろう。

この価値観の部分で言えば、日本の住宅に木造住宅が多かった時代には、思い出の詰まった家の取り壊しの際に感じる切なさや哀愁、記憶の中に残る思い出など感傷的な部分がモノと同時に存在していた。自分の大切にするモノが決して金銭的価値が高いものではなくとも、大切にする気持ちなどが共通の記憶として存在するだろう。

福島第 1 原発から半径 20 キロ圏内の川内村、今回初めて一時帰宅が許された。慣れない不自由な防護服に身を包み、わずか 2 時間、小さなビニール袋一杯に持ち帰ったのは、「思い出」だった。仏壇に花を手向(たむ)け、位牌と家族のアルバムを精一杯ビニールに詰め込んで、愛犬や牛や、みんな家族だった動物たちと、涙の別れを告げに行った。宝石や株券や高価なものを持ち帰った人は、殆どいなかった。

この被災者たちに国側が「(住民らは)自己責任で立ち入る」との同意書への署名を求め、ここに至ってまで政府の責任回避を画策する、無慈悲政治屋と姑息な役人どもは、美学を有しない、つまり日本人ではないと思ってしまう。

彼ら被災者の皆さんは、どこかで「滅びの美学」を感じ取ったのかもしれない。いや、決して滅んではいけない... そう叫びつつも、彼らの心境を察するには、あまりにも哀れすぎる。